真理を守りたい

わたしたちに必要なのは、
わたしたち一人一人が
本当の意味で平和になれることなのです。



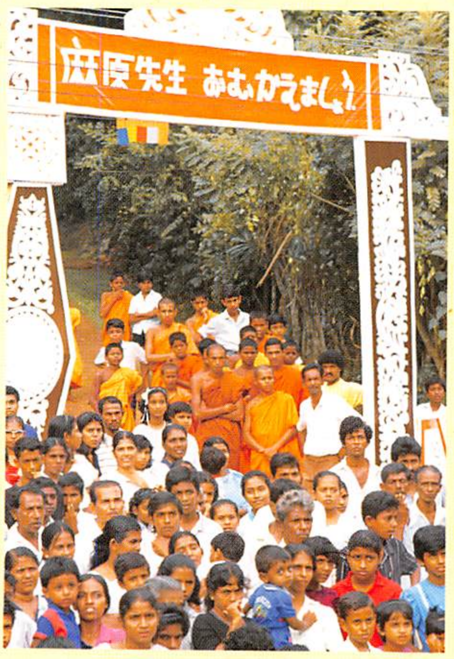
本年三月、麻原尊師がロシア政府より国賓として招かれ、オウム真理教の一行約三百名が、ロシアを公式訪問したわけですが、その背景には、オウム真理教の活動に対する、ロシア側の正当な評価と大きな期待がこめられています。事実、昨年秋に始まるロシア政府との交流のなかで、彼らが最も関心を示してきたのが、原始仏教の正統を今に引き継ぐ、オウム真理教の際だった活動ぶりでした。

昨年、同じく国賓としてオウム真理教を招待したラオスとスリランカは、釈迦牟尼の教えを忠実に守る仏教国として、日本の仏教界の実情を入念に調べたうえで、仏教の正統的な修行に最も真摯に取り組んできたオウム真理教に白羽の矢を立てました。

一方、北伝仏教の嫡子として、数多くの偉大な成就者を輩出してきたチベット密教も、尊師が率いるオウム真理教の活動を高く評価しています。ダライ・ラマ法王をはじめ、カムトゥール・リンポチェ師らの高僧が、尊師の力量を絶賛していることは、つとに知られた事実です。

また、国内でも、こうした活動が、雑誌やテレビでたびたび取り上げられるようになり、なかでも『朝まで生テレビ』における出演は、尊師率いるオウム真理教が、本格的な修行者集団であることを大きく印象づけました。最近は日本においてもオウム真理教に対する誤解がとけ、いよいよオウム真理教の「真実の姿」が理解されるようになってきました。

本書では、これまで知られることがなかったオウム真理教の真実の姿をご紹介しましょう。



麻原尊師を歓迎して集まったスリランカの民衆


ラオス国民の温かい歓迎を受けて


出家修行僧による尊師一行に対する出迎え

麻原尊師が贈るオウム真理教ラジオ番組『エウアゲリオン・テス・バシレイアス』

光はロシアから射してきた——

★エコー・オブ・モスクワ(モスクワ放送)★
AM 720KHz　　毎日23時から24時まで
短波 15.315MHz 毎日22時から23時まで

日本のマスコミでも紹介されたオウム真理教のラジオ放送



TBSニュース



フジテレビ『NEWSCOM』



フジテレビ『NEWSCOM』


ロシアから愛をこめて説法、相談
『オウム真理教』がラジオ番組制作

『報知新聞』
(92年3月26日)



ルツコイ副大統領は、
「麻原尊師と会えて、とてもうれしい。」
と語って、尊師一行を笑顔で温かく迎えてくださった。
　また、尊師はエリツィン大統領のエイズ撲滅運動に賛同し、子供たちのために百万本の注射針を大統領に贈呈することを申し出るなど、会談は終始なごやかに進められた。



露日基金会長ロボフ氏（露日基金会長／前ソ連首相代行／現大統領直属専門評議会議長）は、
「オウム真理教の若いスタッフがモスクワで活躍することを望みます。」
「露日基金の会館が、モスクワの中心地にできます。その中の一部をオウム真理教の拠点にすればいいのではないでしょうか。」
と協力を申し出た。

◆ロシア



ハズブラトフ最高会議議長は、
「尊師が日本だけでなく、全世界で、その純粋な仏教の崇高な理念を普及するため、本当に偉大な活動をなさっていることをわたしはよく承知しております。この活動のますますのご成功と、ご健康をお祈りします。」
「尊師がわがロシアに崇高な使命を負って、おこしくださいましたことを心より歓迎いたします。」
と、さらに今後の尊師への活動の協力を約束してくださった。

◆ロシア訪問をマスコミ各社が報道

◎ロシア通信（共同通信）
　尊師がハズブラトフ最高会議議長と会談されたことについて、現地ロシアのロシア通信から共同通信を通じて、次のように日本の通信社にも報道された。
　麻原氏、ロシア議長と会談
【モスクワ11日共同】
　ロシア通信によると、ハズブラトフ・ロシア最高会議議長は11日、オウム真理教の教祖麻原彰晃氏と会談した。麻原氏は議長に対し、小児病院への使い捨て注射針約百万本の贈与、モスクワの二つの食品加工工場への設備供給、歴史的記念碑などの修復作業への支援などを行ないたいと伝えたという。
　同通信は、オウム真理教がモスクワに病院を建てる可能性もあると報じた。



ロシア正教・ペテリウム府主教と麻原尊師は会談され、宗派を超えて人々の救済のための協力の握手が交わされた。



オウチニコフ元「プラウダ」（共産党機関紙、かつてはソ連を代表する新聞だった）政治論説委員による尊師に対する緊急インタビューも行なわれた。







オウム真理教の舞踏歌劇「死と転生」が、クレムリン大会宮殿で行なわれた。

これは、人間の死の直後から、次の転生までのバルドーと呼ばれる四十九日間を、音楽・舞踏・光・香りを使って再現したものであるが、この東洋思想の精髄を一目見ようという人々が殺到。六千百五十人を収容するクレムリン大ホールのチケットは前日までに完売し、当日も会場前にはチケットを売ってくれという人々が千人以上もあふれた。

公演は大成功をおさめ、終了後は観衆の間から感動を訴える声が続出した。オウチニコフ元『プラウダ』政治論説委員は、
「わたしたちは今日の舞台でチベットの経典を見ることができました。この音楽、舞踏による公演は、西洋人にとてもわかりやすく、オウム真理教が日本の知的水準の高い若者の信徒をたくさん持っている理由がわかりました。」
とコメントを述べた。

この公演の売上は、ロシアの恵まれない子供たちのために全額寄付された。







ロシア訪問中、麻原尊師は二つの大学で講演された。モスクワ大学では、仏教観に基づいた魂のステージについて、モスクワ工科物理大学では、アインシュタインの相対性理論と仏教理論の一致を見事に説き明かされた。

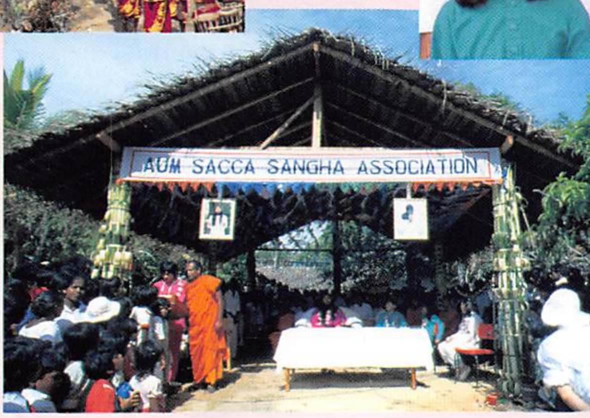
講演が終わっても、満員の会場からは人の波が引かず、質問用紙が殺到するという、オウム真理教関係者が戸惑うほどの反響ぶり。ロシアの知識人の間に、精神世界・仏教についての関心が高いことがうかがわれた。

◆スリランカ

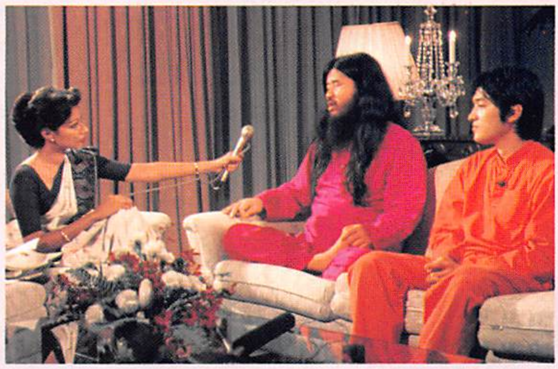


国をあげての大歓迎を受けた麻原尊師。写真は、総理大臣D・B・ビジェトンガ氏（左端）仏舎利（仏陀釈迦牟尼の遺骨）を受け取られたところ。右端は南スリランカ福祉協会グナロカ会長。



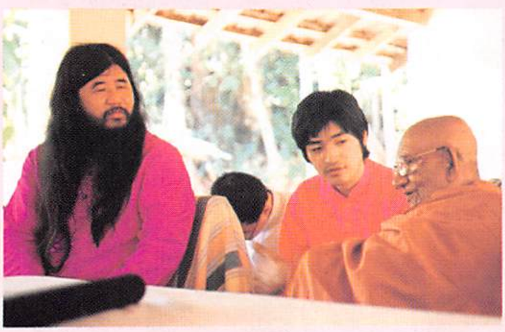


オウム真理教は、スリランカの人々のための奉仕団体〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟の設立を計画している。その概要は、職のない人や経済的に貧しい人を対象に、上座部仏教の教えを学びながら自立できるようにするための援助を目的として、宿泊施設と食品工場の他、日本語と英語の研修の施設を建設するというものである。

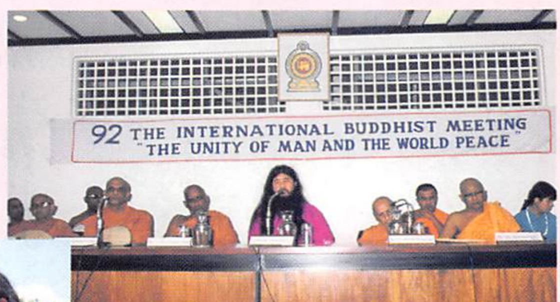


麻原尊師に対して、スリランカ国営テレビの特別番組の取材が行なわれた。インタビュアーは人気ニュース・キャスターのシャーミニー・ラトゥアトェンガさんで、〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟設立の意図からオウム真理教の教義に至るまで、幅広い質問がなされた。

また、道路建設のオープニングセレモニーに出席された尊師に、たくさんの取材陣が押し寄せた。この模様は、早速テレビ、ラジオ、新聞で報道された。



だれもがスリランカナンバー一と認める瞑想家であり学者でもあるアーナンダ・マイトリー僧と。



本年の3月28日には、麻原尊師の呼びかけによって、「国際仏教者会議」が開催され、スリランカを代表する高僧の方々が出席された。



キャラニヤ大学の総学長を務め、仏教研究家として名高いラーフラ僧と。

◆ドイツ



エンダーライン西ドイツ連邦科学省企画部長（当時）と、教育問題について語り合う。



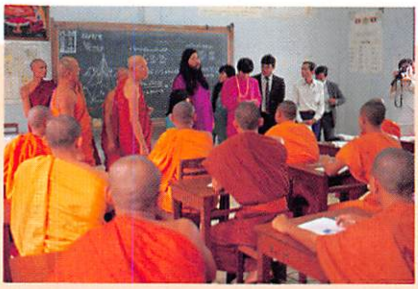
ドイツ社会民主党ビューヒラー氏と、ドイツの再統一問題、共産主義の将来について意見を交わす。

◆ラオス



麻原尊師はラオスにおいても国賓として迎えられ、大歓迎を受けた。ラオス国家建設戦線本部にて、前大統領代行で同建設戦線の長であり、かつ宗教界の最高責任者であるプーミー・ヴンヴィチャ氏と。

「わたしはラオ建国戦線、およびラオの出家修行者、およびラオの仏教徒、およびラオの国民に代わって、あなた方の使節団をここにお迎えできて大変うれしく思っています。」



高等仏教学校で説法をされる尊師

◆インド・チベット（亡命政府）



麻原尊師は古くから、仏教発祥の地であるインド、そして数多くの成就者を輩出してきたチベット仏教の高僧たちとの交流を保っている。チベット仏教の政治・宗教の最高指導者であるダライ・ラマ法王と。

「君が日本に本当の宗教を広めなさい」――こう語った法王。



故カール・リンポチェ師（チベット仏教カギュ派総帥）と。

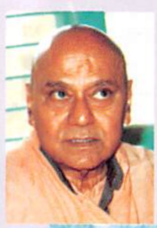
「尊師は偉大な智慧と、偉大な法の理解、そして大いなる愛、すべての者を助けようとする願望をお持ちです。」

と尊師を絶賛する師。

この麻原尊師のステージの高さは、多くの聖者たちが称賛しています。



熱のヨーガの成就者ロブサン・テンジン師（86年2月）



聖者スワミ・チタナンダ（86年2月）



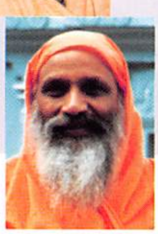
聖者スワミ・ヴィハール・マハラジ（86年2月）



聖者スワミ・クリシュナナンダ（86年2月）



チベット仏教の高僧カムトゥール・リンポチェ（91年5月）



ジュニアーナ・ヨーガの指導者、スワミ・ダイヤナンダジ（86年2月）



日本でも有名な超能力者パイロット・ババ（86年7月）



19世紀の偉大なヨーガ修行者ラーマ・クリシュナ・パラマハンサの孫弟子にあたるスワミ・アカンダナンダ（86年2月）

内外から麻原尊師に寄せられる称賛の声

1、海外の聖者からの評価

麻原尊師は海外の聖者、修行者などから高い評価を受けている。ここでは、麻原尊師に寄せられた称賛の言葉の数々の一部を挙げよう。

◉故カール・リンポチェ師
（チベット仏教カギュ派の総師）

「今生のわたしたちは大きな幸運に恵まれています。それは仏陀（ぶっだ）が現われて法を説き、その法が今なお存在している時代に、わたしたちは転生したからです。さらに、皆さんは偉大な仏教の師に巡り会い、教えを受けています。それは皆さんのグル、麻原彰晃尊師です。尊師は偉大な智慧（ちえ）と、偉大な法の理解、そして大いなる愛、すべての者を助けようという願望をお持ちです。もし、皆さんがこの機会を利用して、法を修行し、解脱を得なかったならば、将来、数知れない未来世においても再び同じように法に巡り合い、師に巡り会うことは難しいでしょう。」（八八年八月・オウム真理教富士山総本部道場にて）

◉ダライ・ラマ法王（チベット仏教総師）

「オウムは宗教的・社会的活動を通じて、人々の覚醒を促すよう努力する団体です。瞑想の実践方法を人々に指導するとともに、オウムの人たちは大乗仏教の伝統を引き続き実践しています。」

（八九年五月・親書）

◉カムトゥール・リンポチェ師
（チベット仏教ニンマ派成就者）

「わたしは尊師の献身的な心・親切心・寛大さ・無私無欲の心など、仏教を修める者としての生来の資質を深く称賛いたします。」

（八九年五月・親書）

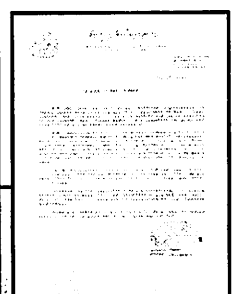
「あなた（麻原尊師）は高い悟りを得ています。」

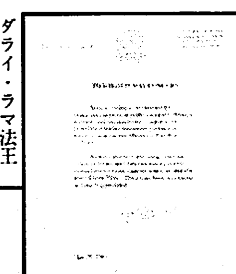
「これはイェシェといわれている人が経験できる段階で、普通の人は経験できない段階です。それは非常に、最高の智慧を得た段階です。パーフェクト・アブソリュート・ディヴァイン・ウィズダム（完全なる絶対なる神の叡智（えいち））を得ることのできた素晴らしいステージです。」

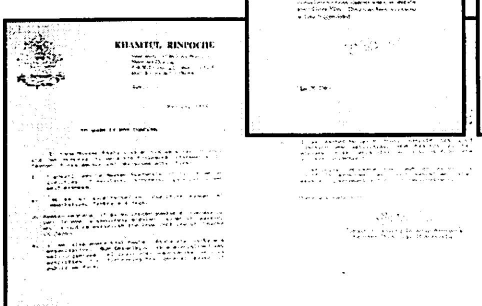
「尊師のご長命をお祈りいたします。尊師ご自身が他の生き物を救済するためにこの世に長くとどまる決心をなさらなければいけません。」

（以上九一年五月・尊師との対談で）

◉カルサング・イェシェ氏
（ダライ・ラマ法王宗教文化局局長）


ダライ・ラマ宗教局からの推薦状


ダライ・ラマ法王からの親書



カムトゥール・リンポチェからの親書

「麻原尊師は、優れた宗教およびヨーガの修行者であり、瞑想に熟達されている。我々が知る限りにおいては、オウムはさまざまな宗教的、社会的活動を通じて、公共の福祉を推進することに努力されている。……オウムは、日本に真の仏法の教義を再び確立するために、大乗仏教の生きた伝統を学び、伝えようと努力されている。」

（八九年五月・親書）

◉グナロカ氏
（南スリランカ福祉協会会長・子供基金福祉協会理事長・ナーガビハーラ寺院副住職）

「麻原先生みたいに、日本で一番偉い宗教関係者が、初めてスリランカにいらっしゃいまして、

スリランカの人々と政府も喜んでいると思います。先生は日本だけでなくて世界でも一番有名な方だとわたしは思います。だから、先生と一緒に僕は仏教のために頑張ります。」

（歓迎セレモニーにおける日本語でのスピーチ）

◉**スリランカ・ナーガビハーラ寺院での歓迎セレモニーで歌われた少女たちの日本語の歌**

「優しい心の日本の皆さん、遠い所から来てくださった、お応えしました。感謝の気持ちだよ。感謝の気持ちだよ。朝日のように見えてる彰晃・麻原先生。両手を合わせてあいさつしましょう。お迎えいたしましょう。大地のようにみんなを支える麻原先生。心の喜びを与えてくださる皆様。こんにちは。」



2、国内の有識者からも高い評価

◉**中沢新一氏**（宗教学者・東京外大アジア・アフリカ言語文化研修所助手）

「僕は彼（麻原尊師）がとても高度なことを考えている人で、高い意識状態を体験している人だと認めています。日本の今いるいろいろな宗教家のなかでも知性においてかなり上等なレベルにいる人だと思いました。今の日本で宗教をやっている人のなかで稀に見る素直な人なんじゃないかな。」

（『週刊ポスト』八九年十二月四日号）

◉**島田裕巳氏**（宗教学者・日本女子大学助教授）

「『幸福の科学』と『オウム真理教』の主張を比べてみると、はっきりいって、『幸福』のほうが底が浅い。それは『朝まで生テレビ』で議論を聞いた多くの人が感じたことだと思う。『オウム』の方は必ず、仏典に立ち返って、自分たちの教えを説いている。『オウム』は最初はヨーガから始まったが、その後は、仏教の本来のスタイルに近づいている。日本の仏教は世俗化しているために『オウム』が特異な集団に見えるが、むしろ仏教の伝統を正しく受け継いでいる。パーリ語の仏典を訳したりして、勉強している点も、それを裏づけている。」

「『オウム』は自分たちの教えの根拠を、仏典や修行に求め、それを実践している。そういう道筋を踏まなければ、深みのある宗教とはいえないだろう。」

（『週刊朝日』九一年十月十一日号）

◉**荒俣宏氏**（作家）

「麻原彰晃はきわめてオーソドックスな20世紀チベット仏教派新宗教の教祖だ、と思った。かれがオーソドックスである理由は、①修行　②師　③神秘的覚醒　のチベット＝小乗仏教三要素がそなわっていたからだった。」

「麻原彰晃と出会って好ましく感じた点は、かれがかなり寛容な人物だったということだ。きたない家と粗末な食事に甘んじている、といった世俗的問題から発して、社会や弟子の対応まで。どれにも幼さに似た無邪気な寛容さがあった。」

「私は麻原尊師にかぎりない好感を抱いた。おそらく解脱した者は幼児のように他愛もないか、あるいは阿修羅のように熱狂的であるかの、どちらかだろう。多くの解脱伝説に述べられているように。麻原彰晃がほんものの解脱者であるとして、かれが示す寛大の姿勢は、あきらかに前者の例といえるだろう。」

（『03』九一年六月号）

◉**栗本慎一郎氏**（経済人類学者）

「麻原さんのように煩悩を越えられた方は、非常に素晴らしいし、そこからの教えを説いていっていただきたいと思います」

（『サンサーラ』九二年一月号）

「オウム・バッシングは危険だ！」警鐘を鳴らす有識者

以上に示してきたように、麻原尊師とオウム真理教は、高い霊性と精神性を持った海外の聖者や、高い知性を持った有識者に高い評価を受けている。にもかかわらず、マスコミや行政権力によって偏見に基づく弾圧を受けた理由は何だろうか？

法学の権威、故末川博博士は、権力による弾圧の本質について、次のように述べている。

「正しい理論は、終局においては、勝つべきものにちがいないけれども、現実には、そのときどきの支配的な力によって抑圧されることが少くない。ことに、理論が真実に基づくとき、それに対する抵抗は強烈であって、力づくで理論をおさえつけようとする無謀な企てが展開される。世の中には真実を知られたり語られたりしては困る人たちがいて、そういう人たちが現実には力を有しているからである。すなわち、政治的、経済的、宗教的その他社会的の支配力を有している人たちやその階層は、自己の支配力をどこまでも持続し現状をそのまま維持しようと焦慮するが故に、その支配力について批判したりその現状について疑惑をもったりするものをおそれきらって弾圧しようとするからである。」

（『法と自由』岩波書店 より）

この末川博士の言葉に、オウム真理教弾圧の本質が見事に言い当てられている。物質主義が頂点に達し、様々な深刻な矛盾を生み出しつつもその解決に行き詰まっている現代社会。そのさ中にあって、いたずらに肥大化する欲望をコントロールし、個々の心を豊かにし安定させることによって、調和のとれた平和な理想社会をもたらす精神主義を実践するオウム真理教。

この両者の相克は、現代という時代が、物質文明から精神文明へ移行しつつあり、現代社会に蔓延している物質主義と、オウム真理教に代表される精神主義が、激しい衝突を開始しているということを象徴している。

というのも、オウム真理教の登場によって、この物質主義社会を支配し、その維持を図る一部の権力者並びにその影響下にあるマスコミなどの物質主義者が、未曾有の「大混乱」を呈し、躍起になって「戦後最大の宗教弾圧」（中京大学・池田昭教授の言葉）に狂奔した。そして、一方では、高い精神性を持つ多くの内外の人々が、オウム真理教の真価を認め、称賛している。

では、次に、オウム真理教に対する宗教弾圧について、その不当性を指摘する有識者の声を挙げよう。

◉池田昭氏（中京大学教授・宗教社会学）

「国家権力は現在『柔らかなファシズム』の時代に入っており、オウム真理教に対する弾圧は戦後最大の宗教弾圧だ。」

「戦後の法体系のもとで、マス・コミ、右翼を含む諸団体、警察権力、村、県・村の行政権力、立法権力と一部の住民が一体となって、オウム真理教の自由を抑圧している。」

「今の自民党政府による国家権力が、かなり国民の統合能力を弱めてきている、ないしはそれ自身動揺を来しているということが、いわゆる信教の自由が弾圧される、否定される、その背景だというふうに思うんです。……宗教というものは特に自立性を持っている団体、ないしは勢力なんですよ。そこで、国家権力は、これを内外政策の遂行のうえで本質的に異質的な敵対的な要素だというふうに見がちになるんです。」

「まさにマスコミが新宗教を取り上げる際に『邪教』というイメージづくりをする、そういう状況というものが最近、特にあるのじゃないですかね。」（著者との対談などより）

◉西山茂氏（東洋大学教授・宗教社会学）

「教団関係者の住民票を受理しない行政当局の対応や、四百名もの大量の警官を動員して教団への一斉捜査や関係者の逮捕を強行した熊本県警の対応は、どう見ても行き過ぎとしか見えません。新宗教を蔑視したり危険視する風潮は、今日の公権力のオウム・バッシ


講演される方々のプロフィール

「やわらかなファシズムと宗教弾圧」

「私達の人権が危ない－オウム真理教問題の本質」

「多くの人々の支援により、マスコミによるでっちあげ報道と国家権力の不当性を訴え、力強いたたかいで裁判闘争中」

演題：「マスコミのでっちあげ報道」

「今、警察にとって一番うるさい人権の弁護人。ヤングライダーの間では圧倒的な人気」

演題：「警察権力と人権」

ゲストプロフィール

「にこやかな笑顔の内側に、秘めたる闘志」

演題：「少数者に対する偏見と人権」

「国家権力による一人に対する弾圧は、全ての人民に対する弾圧とみなすイデオロギー、思想・信条を問わず支援をする運動家」

「この国では「人権」は死語になりつつある」

「宗教と国家をテーマに、真剣に取り組んでいる宗教社会学者」

演題：「信教の自由を禁止するもの」

励ましのメッセージ

「真の自由と平等を求める10.20市民の集い」
――マスコミの情報では本質を見極めることのできない問題が熱く語られた。

ングも、そうした新宗教への差別と偏見に根ざしているといえましょう。わたしたちは、戦前期に体験したような人権と信教の自由の侵害を二度と許してはなりません。」

（九一年十月二十日の練馬文化センターにおける「真の自由と平等を求める１０・２０市民の集い」へのメッセージより）

◉武邦保氏（同志社女子大学教授）

「このファシズムへの道を切り開くような、宗教弾圧を通して必ず国はファシズムへの道を容易に走ることができる。だから、宗教を弾圧することはファシズムを狙う権力者にとっては、最も必要な手段なのだ。」

（前掲集会でのスピーチより）

◉鈴木明郎氏

（熊本大学教授・カトリック信徒）

私が（オウム真理教の）道場で見た人達は真剣でした。（中略）このこと、即ち、その宗教的価値観は別にしても、彼らの純粋さ、一途さ、非世俗的禁欲生活もまた排除の背景にあるように私には思われます。現代社会に蔓延している不純性、不真面目性、曖昧性、なれ合い性、非論理性、金権的物質世俗主義の中で生きている我々には、彼らの生き方は大変重たく感じられます。その事を通して、自らの生き方への痛烈な批判として受け取らざるを得ない事への反発、そして、心の奥底を覗かされる事への恐れでもありましょう。

オウム教信者の人権めぐり討論

熊本市で市民集会

阿蘇郡波野村に進出したオウム真理教信者の住民票不受理問題などをテーマにした「人権尊重を求める市民集会」が二十三日、熊本市の県福祉会館で開かれた。人権尊重を求める市民の会主催。

市民ら約五十人が参加。



約五十人が参加した市民集会

パネリストとして出席した熊本大学教養部の大江正昭助教授（法学）は、「外圧がかかれば会場は貸さない。判断は裁判にゆだねるという考えは誤り」と、右翼団体などの阻止行動を理由に、同市民の会の会場使用を断った県立劇場の対応を批判。住民票問題については、「裁判よりも行政で決着をつけるのが望ましく、波野村執行部に英断が求められている」と述べた。

公開討論会では同教団の青山吉伸顧問弁護士ら四人がパネリストとして発言したが、「波野村住民は参加を求めたが出席しなかった」（同市民の会）。

熊　本　日　日　新　聞

オウム転入不受理で波野村長を告発

「市民の会」

オウム真理教信者の転入届問題で、人権尊重を求める市民の会（中島真一郎代表）の会員七人が二十六日、楢木野惟幸波野村長に対する、職権乱用罪による告発状を熊本地検に提出した。

告発状では、楢木野村長は、昨年十一月二十六日に信者二人が提出した住民移動届を受け付け、今年二月七日に居住確認調査をしたが同月十四日、不受理を決定。受理を求めた県の指導にも従おうとせず、住民としての権利を妨害した、としている。

楢木野村長は「告発状の内容を見なければ何とも言えないが、（オウム教団ではなく）第三者から告発されるのは心外だ」と話している。

「信者の人権」語る

熊大でオウム教シンポ

阿蘇郡波野村のオウム真理教徒の人権問題をテーマにしたシンポジウムが二十三日、熊本市黒髪の熊本大学内で市民、学生、同教団信者など約百三十人が出席して開かれた。人権尊重を求める市民の会（中島真一郎代表）熊大グループ主催。

パネリストとして芦田徹郎熊大助教授、山下幸夫弁護士ら五人が発言。山下弁護士は「人権に例外はなく、住民票不受理は許されない」は住民村、県えて、持つ以視でき と教団けた 現状が「信健康保給付が窮状を野村を律はお利は生に考え反論し



熊大で開かれたオウム真理教徒の問題を考えるシンポジウム

西　日　本　新

波野村は問題解決へ対話を

オウム真理教団と人権の会申し入れ

オウム真理教団と「人権尊重を求める市民の会」は四日、阿蘇郡波野村に対しそれぞれ、波野村が教団側との話し合いに応じ、住民票不受理問題を円満に解決するよう申し入れた。

それぞれの申し入れでは、両者の対話によって無益な信者追放運動を中止し、地域発展のため信者と村民との共存を図るよう求めている。

オウム教信者への差別撤廃申し入れ

人権尊重を求める会

人権尊重を求める市民の会（中島真一郎代表）は四日、阿蘇郡一の宮町の法務省熊本法務局阿蘇支局を訪れ、オウム真理教信者に対する人権侵害と差別を撤廃

「捜査は人権侵害」

市民グループらが声明

[illegible]

信者の人権擁護を要望

市民グループ

県内の大学教授や市民運動家でつくる「人権尊重を求める市民の会」（中島真一郎代表）のメンバー六人が三日、熊本県庁を訪れ、細川知事と村井県警本部長らに対し、オウム真理教信者の人権を守るよう求める申し入れ書を提出した。

申し入れ書では①波野村によるオウム信者の住民票不受理②県警の一斉捜索と逮捕③公共施設の使用許可取り消し④阿蘇広域行政事

それは、相対的価値観の中でしか生きていない不安定な存在と、絶対的価値を求めて生きる確かな存在との葛藤でありましょう。それは、又、自己を喪失した存在と、自己の確立を求める存在との戦いでもありましょう。」

（『みんなを好きでいたい――オウム真理教徒に人権はないの？』人権尊重を求める市民の会発行より）

◉遠藤誠氏

（弁護士・帝銀事件死後再審弁護団長）

「『現代人の仏教の会』の教祖であるわたしは、もちろん、オウム真理教の信者ではありません。しかし、最近のオウム真理教信者の住民登録に対する熊本県波野村役場の住民基本台帳法違反の行為や、青山吉伸弁護士とオウム真理教の幹部に対する国土法違反に名を借りての警察の弾圧は、誠にもってとんでもない権力の犯罪行為であります。

日本は、今や、ファッシズムの段階に突入しました。そして、それを支えているものは、権力とマスコミのたれ流すデマゴギーに対する国民一般の無知であります。

太平洋戦争という侵略戦争に、国民一般がのめり込んでいったのも、またこの国民の無知によるものであります。」

（前掲集会へのメッセージより）

◉山下幸夫氏（弁護士）

「『差別に例外なし』ということをここで強

く申し上げておきたい。今回の問題（熊本県波野村でのオウム真理教出家者に対する住民票不受理措置）も、『オウムは別だ』という発想をしていると、いずれは、それが段々と広がって、結局、自分自身の自由がなくなるという形ではね返ってくると思います。（中略）最終的には、国家権力から見て都合が悪い人とか邪魔になる人を排除することを認めることになる危険性がある。」

「自分とは違う思想や宗教を認めない、異端を認めないということは、結局、『人権』そのものを認めないことに通じると思います。（中略）今回のオウム真理教徒に対する弾圧は、『人権』を本当に自分たちのものとしていけるかどうかを試す『踏み絵』であり、『リトマス試験紙』であると私には思えるのです。」

（前掲『みんなを好きでいたい』より）



人権尊重を求める市民の会発行の『みんなを好きでいたい』



宗教弾圧の実態を暴くものとして話題をよんだ『ファッショは始まっている』（青山吉伸著）

◉桑原重夫氏
（日本基督教団摂津富田教会牧師）

「最近『量』をかさにきた人々の集団意識を背後にもって人間の基本的人権ともいうべきこの『信教の自由』、また『思想・信条の自由』を圧殺し社会的に排除しようとする動きがしばしばあることを見聞きします。今、『オウム真理教』を巡って起きている事態もその著しい現われの一つだと思います。特に、『オウム真理教』を巡っては、マスコミが意図的な誤報でその社会的風潮に拍車をかけ、またそれにのっかって、権力や行政が不当な弾圧をかけている事実を耳にします。」

（前掲集会へのメッセージより）

◉横田勲氏（日本基督教団大泉教会牧師）

「オウム真理教顧問弁護士青山吉伸氏著『なぜわたしは逮捕されなくてはならなかったのか（真理の弁護士がんばるぞ!! PART2）』を読ませていただいた。警察権力・行政・マスコミ・地域住民によるオウム・バッシングの詳細が報告されていてかなりの程度説得的である。そしてファシズムの怖ろしさを感じさせる。（中略）オウム真理教に対する一般市民の反応も同じで、週刊雑誌をはじめとするマスコミの〝売らんかな〟の姿勢が作り出す偽りの情報に完全に巻き込まれている。（中略）警察権力・行政・マスコミがあれだけ居丈高になれるのも、一般市民にマスコミ迎合の姿勢があるからだ。そして、市民の心の底にあるのは、『出家』という異形（いぎょう）が象徴的に問うている『いまの自分たちの生き方を根本的に考えること』への不安であるだろう。」

（前掲集会へのメッセージより）

◉大庭絵里氏（上智大学非常勤講師・「人権と報道・連絡会」会員）

「マス・メディアは、あえて批判材料をオウム真理教に押し付け、事実の確認のないまま、大衆受けする『話題』として情報を我々に提供している。また、オウム真理教に関する知識はマス・メディアによって管理され、その中でオウム真理教に対する偏見は増幅するばかりである。

既製の世俗的常識、既製の宗教への挑戦的な性格をもつ新宗教は、それ自体、世間から逸脱視されやすい。しかし、今までの反オウム真理教報道は、それ以上に、社会的抹殺の傾向を帯びている。

報道は言論の自由、思想・信条の自由の上に成り立っている。マス・メディアが宗教教団、あるいは宗教者を否定し、一方的な批判に加担することは、思想・信条の否定であり、自らの基盤を危うくするものである。こうした言論の自由、思想・信条の自由のなし崩し

的崩壊現象が我々の社会に起こっていることに、我々はもっと注目し、警戒すべきだろう。」

（前掲集会へのメッセージより）

◉中島眞一郎氏（塾講師・「人権尊重を求める市民の会」代表）

「冷静に事態を振り返り、具体的事実を拾い上げて考えていく限り、オウム真理教団が他の宗教教団に比べて特別に『反社会的でおそろしい』宗教団体だと言わなければならない理由は見いだせません。にもかかわらず現在の深刻な事態をもたらした責任の一端はマスコミにもあると思います。一連のオウム真理教問題の経過を見るとき、一部週刊誌等マスコミによる『恐ろしい、反社会的宗教団体』とのキャンペーンがなされ、それに基づく実態のない恐怖心が（波野村）村民の中に作り上げられて進出反対運動が展開され、その作られた世論を背景に行政、議会、警察などの公権力がオウム真理教徒への弾圧に加担していった構図が浮かび上がってきます。流言、飛語に惑わされることなく、事態を冷静に判断していくことが求められています。そして、私達一人一人の中にもある、ともすれば『自分と異なる人』を差別し、排除しようとする在り方がこの問題の根底にあると思います。私達自身もその事を十分自覚しながらもオウム真理教徒に対する人権侵害が容認されていくことは私達一人一人の人権も守られなくなると思います。」

（「人権尊重を求める市民の声明」より）

各地の大学で大反響を呼んだ麻原尊師

麻原尊師は若年層の間でも高い人気を得つつあるが、それを示す事実として、各地で開かれた尊師の大学講演会における学生の反応を挙げることができる。

昨年（九一年）の十一月、麻原尊師は東京大学、京都大学、東北大学、信州大学などの全国の大学において学生を相手に講演され、さらに気象大学校では宗教学者の島田裕巳氏（日本女子大学助教授）との公開対談をされ、いずれの地でも好評を博した。

十一月二十三日に行われた東京大学の講演会では、大宇宙の創造のプロセスから社会問題まで広範な質問が出されたが、どの質問に対してもスパッと回答なさる尊師の明快さがきわ立っていた。

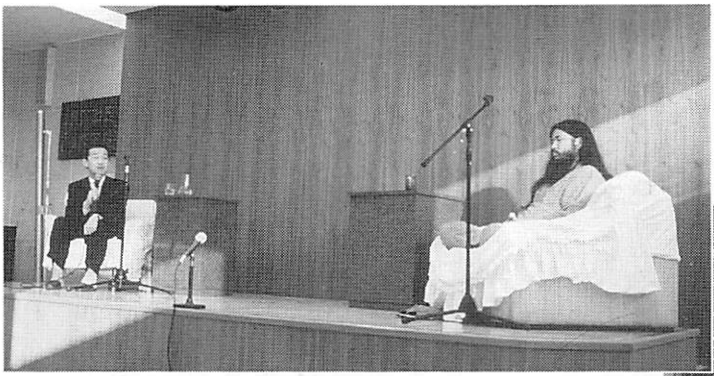
二十四日の、京都大学講演会においては、定員二百人の会場に、麻原尊師を一目見ようとした学生千三百人以上が詰めかけて大変な盛況を呈し、予想外のあまりの混乱ぶりに学園祭実行委員会が一時講演の中止を検討したというほどである。

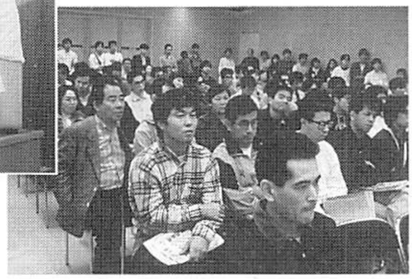
後半の大質問会では、時間を延長して、人



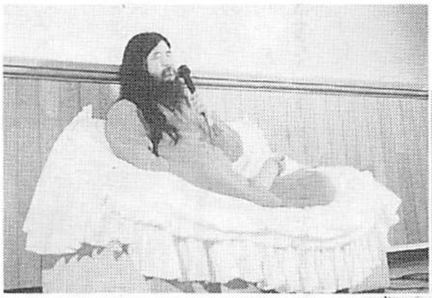


信州大学での講演会では、定員の二倍以上の八百名もの聴衆が詰めかけた。





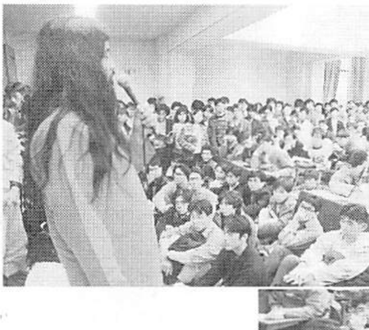
気象大学では、島田裕巳助教授と対談しながらの講演となった。





東京大学では、二階席のある大教室でも立ち見の出るほどの大盛況だった。

類学や物理学の専門家からの問いに答える尊師に何度も熱い拍手が巻き起こっていた。
オウム真理教が、学生をはじめとする若者層に並々ならぬ高い関心を呼び起こしていることがよくわかる。





座席に座りきれず、あふれんばかりの学生が集まった京都大学講演会。

激増する麻原尊師へのマスコミの取材・対談

さらに、麻原尊師はいまや日本宗教界の第一人者として、マスコミの注目するところとなっており、次に示すような多くの出演依頼や取材を各方面から受けている。



『ビートたけしのTVタックル』（91年12月30日）ビートたけし氏と対談。話が弾み、録画終了後にビートたけし氏から尊師に個人的にお話しされるなど、ほほえましい光景も見受けられた。



『朝まで生テレビ』（九一年九月二十八日）経済人類学者の栗本慎一郎氏、日本女子大学助教授の島田裕巳氏、評論家の西部邁氏らと共に宗教問題に関する討論を行なわれる。



『おはよういい朝　入川保則です』大阪放送（ＯＢＣ）のラジオ放送に出演される尊師。



『とんねるずの生でだらだらいかせて』（91年10月30日）高校生などの若者の質問に対して麻原尊師が真理の法にのっとって誠実に回答。



『おはようナイスデイ』（91年12月27日）92年の宗教界についての麻原尊師が予言。

麻原尊師の対談・インタビュー記事

宗教的理解に基づく雑誌の取材も殺到している。



『流行通信オム』（流行通信社）九一年九月号からインタビュー。

「『オウム真理教』というのはまず、宇宙の本質的な創造・維持・破壊、これを〝オウム〟という言葉で表わしています。つまり、無常を表わしているわけですね。そして〝真理〟というのは、サンスクリット語でサティアン、パーリ語でサッチャというんですが、絶対的な叡知を表わす。」



『SPA!』（扶桑社）九二年四月十五日号が、オウム真理教ロシア救済ツアーを報道。

「現在、オウム真理教はモスクワに支部を開く準備を進めている。今回の『ロシア救済ツアー』はそのための足固めだといっていい。ハズブラートフ最高会議議長が会見の中で、『わがロシアの指導部の重要な課題のひとつは、国民の心に和平を培うことであります。そのために、人間を高尚にするすべての宗教、宗派が自由に活動できるように国家として努力しております』と、オウム真理教に対する期待を語っている。」



『エムジャパン』（流行通信社）91年12月号がインタビュー。



『アイディージャパン』（ユーピーユー）91年12月号がインタビュー。



『SPA!』（扶桑社）91年12月4日号がインタビュー。



『サンサーラ』（徳間書店）92年1月号で栗本慎一郎氏と対談。



『SPA!』（扶桑社）91年12月18日号がインタビュー。



『360』（三田出版）92年2月号がインタビュー。



『現代』（講談社）92年2月号で、島田裕巳助教授・部落解放同盟中央本部書記長の小森龍邦氏とてい談。



『別冊太陽』（平凡社）通巻77号（92年4月発行）で、宗教学者の山折哲雄氏と対談。



『ブルータス』（マガジンハウス）九一年十二月号で宗教学者の中沢新一氏と対談。

「今のオウム真理教では、まず、小乗の教えを身につけさせ、生活の規範をコントロールしながら、意識を上のほうに、つまり神様のほうに向けさせていく訓練が行われます。個人の煩悩を捨断していくための訓練です。次の段階では、ある程度個人の煩悩を、コントロールできるようになった人を大乗の思想のほうに展開していくことが行われます。」



『BOX』（ダイヤモンド社）九一年十二月号がオウム真理教記事を掲載。

「新世代の宗教団体の代表的存在といわれるオウム真理教だが、その教義の根本は、伝統的仏教。釈迦牟尼の教えを忠実に再現すべく経典の収集、研究を行い、出家修行に励む姿は、タイ、ラオス、スリランカなどの仏教徒と何ら変わらない……」



『０３』（新潮社）91年6月号で作家の荒俣宏氏と対談。

『十人十色』（メディアハウス）91年9月号がインタビュー。





『サンサーラ』（徳間書店）91年10月号で田原総一朗氏と対談。

『スタジオボイス』（流行通信社）91年11月号で、作家の中島渉氏と対談。



『小学六年生』（小学館）九二年一月号がインタビュー。





『クロール』（ソニーマガジン）92年1月号がインタビュー。

『バッカス』（TBSブリタニカ）92年1月号がオウム真理教記事を掲載。



①だから私は嫌われる
（ビートたけし著、新潮社、1000円）
②ザ・ハウス・オブ・ノムラ（アル・アレツハウザー著、新潮社、1900円）
③超能力秘密の開発法
（麻原彰晃著、オウム出版、980円）
④カノッサの屈辱
（フジテレビ編、扶桑社、1000円）
⑤背負い水
（荻野アンナ著、文芸春秋、1100円）
③タモリ・ウッチャンナンチャンの世紀末クイズ
（笑っていいとも編、扶桑社、700円）
④超越神力　PART１
（麻原彰晃著、オウム出版、980円）
⑤銀座のカラス
（椎名誠著、朝日新聞社、1600円）
⑥黒豹ダブルダウン６
（門田泰明著、祥伝社、730円）
⑧貧困旅行記
（つげ義春著、晶文社、1600円）
⑨風塵抄
（司馬遼太郎著、中央公論社、1200円）
⑩タターガタ・アビダンマ
（麻原彰晃著、オウム出版、550円）

①人間革命（11）
池田大作（聖教新聞社）
②それいけ!!ココロジー　真実のココロ
それいけ!!ココロジー編（青春出版社）
③キリスト宣言　PART２
麻原彰晃（オウム出版）
④ウルトラマン研究序説
サーフライダー21編著（中経出版）
⑤わが友　本田宗一郎
井深大（ごま書房）

①それいけ!!ココロジー
（それいけ!!ココロジー編、青春出版社、1100円）
②わが友　本田宗一郎
（井深大著、ごま書房、1100円）
③これが尊師！
（オウム出版広報部編、オウム出版、570円）
④知的生産性向上システムＤＩＰＳ
（小林忠嗣著、ダイヤモンド社、1500円）
⑦グラスの向こうに
（園田静香著、出版芸術社、1200円）
⑧ロシアの悲劇
（小室直樹著、光文社、790円）
⑨真実の仏陀の教えはこうだ！
（麻原彰晃著、オウム出版、980円）
⑩人間の絆　響動編

⑥毒猿　新宿鮫Ⅱ
（大沢在昌
日本
本放
置
甬著
！
マガ
奉日
周平
く熊
づめ
もこ
かう
信著
F
書、
して
著、
「U
ンナ
・シ
ー出版サービス
⑤家族手鏡

出版活動

正しい仏教の教えを残すために、オウム真理教では出版活動にも力を注いでいる。東洋思想の真髄であるオウム真理教の教えは着実に多くの人の心をとらえ出している。















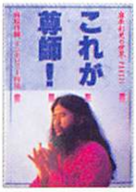
































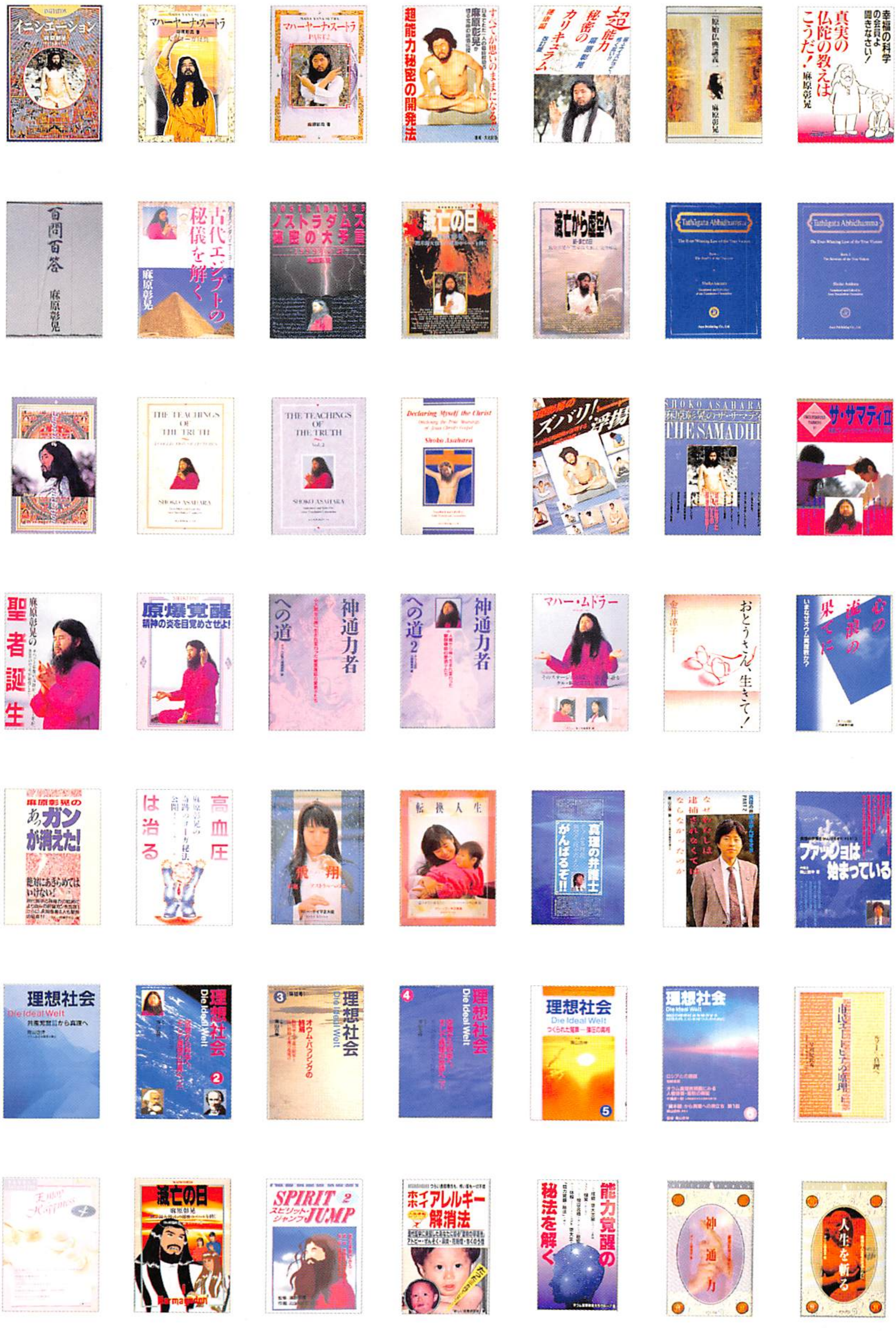


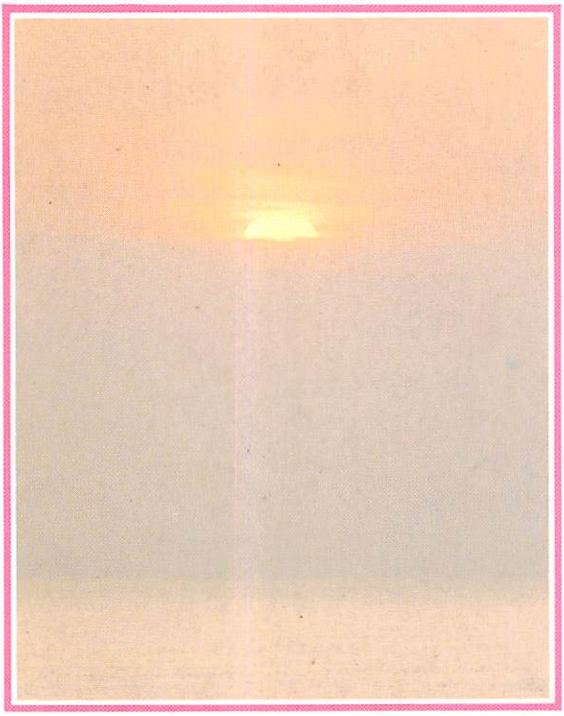









イニシエーション
マハーヤーナ・スートラ
マハーヤーナ・スートラ
超能力秘密の開発法
すべてが思いのままになる!!
麻原彰晃
超能力 秘密のカリキュラム
麻原彰晃
麻原彰晃
幸福の科学の会員よ聞きなさい!
真実の仏陀の教えはこうだ!
麻原彰晃
百問百答
麻原彰晃
古代エジプトの秘儀を解く
麻原彰晃
ノストラダムス
秘密の大予言
滅亡の日
滅亡から虚空へ
Tathāgata Abhidhamma
Tathāgata Abhidhamma
THE TEACHINGS OF THE TRUTH
SHOKO ASAHARA
THE TEACHINGS OF THE TRUTH
SHOKO ASAHARA
Declaring Myself the Christ
Shoko Asahara
ズバリ!浮揚
SHOKO ASAHARA
THE SAMADHI
サ・サマディII
麻原彰晃の
聖者誕生
原爆覚醒
精神の炎を目覚めさせよ!
神通力者への道
神通力者への道2
マハー・ムドラー
おとうさん、生きて!
心の流浪の果てに
いまなぜオウム真理教か?
麻原彰晃の
あのガンが消えた!
高血圧は治る
飛翔
転換人生
真理の弁護士
がんばるぞ!!
なぜわたしは逮捕されなくてはならなかったのか
ファッショは始まっている
理想社会
Die Ideal Welt
共産党宣言から真理へ
理想社会
Die Ideal Welt
2
3
理想社会
Die Ideal Welt
4
理想社会
Die Ideal Welt
理想社会
Die Ideal Welt
5
理想社会
Die Ideal Welt
滅亡の日
麻原彰晃
SPIRIT 2
スピリット・ジャンプ
JUMP
ホイアレルギー解消法
能力覚醒の秘法を解く
神通力
人生を斬る



宗教法人 オウム真理教